

## ガガーリンの原点 バイコヌール宇宙基地

藤本 信義

ロシアの町ではガガーリンとよく出会う。あるときは力強く両手を高く掲げ、あるときは親しげに、またある時には物思いにふけるようにその町その通り毎に様々な表情を見せる。27歳の青年が1961年の4月12日に宇宙に飛び立った、バイコヌール宇宙基地はカザフスタン共和国のチュタラムにある。国際宇宙ステーションに人と物資の両方を送り届けることができる唯一の宇宙港だ。

ソユーズロケットの1段目はたくさんの小型エンジンを束ねて推力を発生するクラスター型の設計が特徴だ。ガガーリンを打ち上げたボストークロケットのころからこの基本形態は変わっていない。日本のHⅡAロケットの一段目が大型のエンジン1基なのと対照的なデザインである。



Поехали!

発射台に向かうソユーズロケット

2011年の夏に打ち上げ準備リハーサルでバイコヌールを訪れていた時にちょうどこのロケットの打ち上げを見学することができた。モスグリーンの機体は発射台に据え付けられてから燃料が注入される。マイナス190℃の液体酸素が注入されると、この部分は霜に覆われるので、打ち上げ直前のロケットが白銀に輝くそ

の姿が印象的だった。

バイコヌール宇宙基地で働く人は、宇宙基地に隣接するオアシスの様な町バイコヌールで暮らしているが、我々は宇宙基地の中の宿舎に泊まり込み、実験生物の飼育リハーサルを行っていた。日本の種子島や内之浦宇宙センター、あるいはアメリカのケネディ宇宙センターなど、海辺にあり水と緑に囲まれた発射場と違い、見渡す限り茶色で風が吹きすさぶ荒涼とした内陸に立地する宇宙センターでの生活は何から何まで興味深い。夜のうちにやってくるラクダの糞が道路のあちこちに山盛りとなっていたり、獐猛（に見える）野犬が平然と基地内を闊歩していたりする反面、食堂のおばちゃんほどこのスローバヤにもいる、ロシアのお母さんだったりする。

夜ともなれば前を歩く人の背中を星明りだけで見分けるほどの漆黒の闇に包まれるのも、バイコヌール宇宙基地ならではの。ガガーリンの有名なことば、“Небо очень и очень тёмное, а Земля голубоватая” そのものじゃないか！と妙に納得してしまった。

アメリカの有人宇宙船の開発が進んでいるので、日本人宇宙飛行士がバイコヌールから打ちあがる機会は残り少なくなってきたが、もう一度行きたい場所の一つである。

2019年5月

参考 国際宇宙ステーションと世界の旅。

<http://iss.jaxa.jp/column/station/vol01.html>

## カザンとトルストイの青春

畔上 明

モスクワから東に向かって飛ぶこと1時間半、雄大なヴォルガ川を眺めながら下降してゆく先にタートルスタンの中心都市カザンがあります。

7～8世紀ヴォルガ川畔に住みついたトルコ系遊牧民ブルガルがタートル人のルーツとも言われており、13世紀にはモンゴル帝国の配下に置かれましたが15世紀にカザン・ハン国が成立、そのタートル人のムスリム国も16世紀半ばイワン雷帝によって征服され、ロシアのヴォルガ川以東進出への突破口となったそうした歴史上の転換を目撃した地理上の要でもありました。

都市人口125万人の内ロシア人とタートル人が現在ほぼ同数居住し、市の中心部のカザン・クレムリン構内にはロシア正教の大聖堂とイスラムのモスクが並立する非常にユニークで興味深い文化に触れることが出来る場所といえます。

石油、化学プラント等による経済発展も著しく、2012年に日露投資フォーラム開催、日本からは枝野経済産業大臣率いる200名の代表団がカザンを訪問、2013年のユニバーシアード競技大会には600名以上の日本選手が参加、そして昨年度のサッカーワールドカップ会場として注目された「カザン・アリーナ」及び空港に隣接した「エクスポ・センター」に於いて今年8月には技能五輪が催されることもあって、その施設下見のアテンド役でこの春私はカザンを訪れる機会に恵まれました。

目を惹く彫刻や洒落た店に見とれつつ散策する楽しみに満ちたパウマン通り、まるでテーマパークの様な景観のタートル人旧居住地区、カザンカ川畔の遊歩道、そして何よりレー

ニンやレフ・トルストイが学んだカザン大学が市の中心部に広がっていることが魅力です。金沢大、埼玉大、筑波大、東京外大との交換留学も行われているとのことで、日本からやってきた学生からは住み易い町との評判も聞きます。

作家トルストイは、僅か2歳で母を亡くし、次いで8歳で父を、さらに13歳の時、後見人である叔母アレクサンドラを亡くしたこともあって、もう一人の叔母ベラゲーヤの世話となるため1841年カザンに兄妹と共に引っ越したのです。祖父がカザン県の知事を務めた時期ベラゲーヤ叔母さんがカザンの貴族ユースコフに嫁いだという縁で少年トルストイの環境が大きく変わったのです。兄3人も学んだカザン大学に1844年16歳のトルストイは入学、東洋学部アラビア・トルコ(タートル)文学科で学び始めたものの、女子大の舞踏会や祖父や叔母の人脈による社交の場に顔出しし過ぎて学業に身が入らず落第。法学部に転部するも、多感で深く思索をめぐらせるトルストイには大学生活が合わず1947年には退学してしまう、そんな一筋縄ではいかない青春時代…。

若き日に顔に劣等感を持ち放埒な行動に走ったというトルストイの逸話を聞いた高校時代の私は屈折した青年の心に共鳴し、そんな彼の並ではない美しく純粋な視線、鋭い観察力、現実を実に生き生きと描写する力に対して強い関心を持ったのです。

カザンの街を歩くことは、トルストイの青春に思いを馳せると同時に、私自身の若き無様な日々を反芻する時間ともなったのです。

(「プロコ・エアサービス」シニア・アドバイザー)

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております